

## 第3章 インタビュー調査から (2)

# 地域社会と外国人住民の 「つながり方」

～ジェンダーに注目して～



### 長谷部美佳

東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターフェロー  
首都大学東京非常勤講師

## 1 はじめに

地域社会——特に日本人住民をその主たる構成員と前提とする——が、外国人住民の社会的包摂にどのような役割を果たすかについては、これまでほとんど論じられてこなかった。特に移民研究の分野では、移民の定住のコストを下げるものは、同じ文化的出自をもつエスニック・ネットワークか、あるいは親族を基盤とするネットワーク（この2つは重なる場合もある）が中心的な存在であると考えられてきた。武田論文でも明らかなように、今回の鶴見での聞き取り調査で、日本である一定の成功を収めている、あるいは日本社会の中に何らかの形で「包摂」されている移住者たちは、エスニック・ネットワークをうまく活用しているケースが見受けられた。特に日系人がその住民の多くを占める鶴見においては、このエスニック・ネットワークとは単純に「出身国」が同じというネットワークだけでなく、いわゆる沖縄系のネットワークを含んでいるが、それを資源として成功しているケースがいくつか見られた。しかし同時に、渡戸論文にあるように、必ずしもエスニック・ネットワークをその中心としたエスニック・コミュニティが一枚岩で資源をすべて提供するわけでもないことも明らかとなった。

一方、これまでその役割が論じられてこなかった地域社会については、今回の

聞き取り調査の中で、その重要性が浮き彫りになった。また、地域社会とのつながりが得られるか得られないかにはジェンダー差があることも明らかとなった。そこで以下では、聞き取りを行った19名のうち、親族や地域社会とのネットワークについての質問を行わなかった1名を除いた18名について、地域社会がどのような役割を果たしているのか、またつながり方についていかなる差があるのかを検討していきたい。本稿では、本チームが社会的つながりを持つ場所として掲げた4つのうち、「近隣」という言葉をほぼ地域社会と同じ意味で使うものとするをご了解いただきたい。

## 2 「つながり」はどこにあり、なぜ重要なのか？

そもそも「社会的つながり」とはどこにあるのだろうか？「社会的つながり」とは、友人、親族、趣味、信仰、学会など、共有できる目的を持っている人との相互依存関係に、何らかの形でつながっている個人からなると考えられている。よって友人や親族の間にあると考えるのが一般的だろう。本チームでは、鶴見の外国人住民が持つ「社会的なつながり」をとらえるには、4つの領域があると考えた。「親族」、「近隣」、「友人」、「就労」である。「親族」の中には、いわゆる直系の核家族から、祖父母、兄弟、いとこなど拡大家族などが含まれる。また「近隣」には自治会や、近所に住んでいる人たち、子どもの保育園、小中学校のPTAなどが含まれ、そのほか友人と重なるとも考えられるが、地域のサポートを提供するNGOなどがこれに含まれる。また、基本的にこの「近隣」は日本人を主とする構成員からなると考える。「友人」には自身の学校や趣味の場所、あるいは同国人同士であるというエスニック・グループの友人、さらには宗教ネットワークが含まれる。「就労」には職場の同僚、斡旋会社の担当者などが含まれる。外国人の住民は、この4つの領域の中で、様々なつながりを構築し、そこから情報を含めた様々な資源を得ることで、日本社会での生活を円滑にしていく。詳しくは次節で述べるが、実際に多くの外国人住民がこの4つの領域のどこかで社会的つながりを持っており、それは「親族」だけの場合もあれば、「親族」と「友人」の場合もある。「近隣」と「親族」の場合もある。そのつながり方は非常に多様である。

ではなぜ「社会的つながり」が外国人住民には重要なのだろうか？「社会的つながり」の重要性とは、つながることそれ自体にあるとも考えられるだろう。社会関係資本という言葉を最初に使ったハニファンは、社会関係資本とは「善意や友情、お互いに対する思いやりなど個々人や家族などの間で行われる社会的な相

互行為」の中にある資源であり、「ある人が隣人のところに来れば、その隣人にはまたその隣人がいて、こうした中に社会関係資本が蓄積され、ある人の社会的ニーズはすぐに満たされる」[Hanifan, 1916] とその機能を述べている。つながることで、ある人の社会的ニーズが満たされるというのだ。近年の研究、特に1970年代に経済学者のローリーが社会関係資本という言葉を経済学的な文脈で使用してからは[Loury,1977]、社会的ニーズと同時に「経済的」な資源に転化できると論じられる傾向にある。またポルテスは、この「社会的つながり」に帰属することを通じて、「ある人が利益を確保する能力」のことを「社会関係資本」と呼び、社会的つながりは「利益」につながることを示した[Portes, 1998]。その後の多くの研究、特に移民研究の分野では、多くのエスニック・ビジネスが社会関係資本に関連して成功していることが明らかになり、社会関係資本は、ホスト社会のメインストリームでの雇用を手に入れるのが困難な移民にとって、重要な「経済的資源」を提供するものと論じられている。社会的つながりは、社会的ニーズを満たすものであると同時に、経済的資源ともなりうるものだ。日本社会の中でより弱い立場に立たされやすい外国人住民にとって重要になる。

先に鶴見での聞き取りから、外国人住民は4つの領域のどこかで社会的なつながりを持っていると述べ、そのつながり方は多様であることを指摘した。そこで以下では18名がどの領域で「社会的つながり」を持っていて、それがどのように社会的成功につながっていると考えられるかを検討していきたい。

### 3 18人の聞き取り対象者から見るつながりのあり方

ここでは18人がつながりについてどのように言及しているか、特に地域社会とのつながりについて言及しているかどうかには焦点を絞り、その言及の有無を一覧にした。また同時に地域社会とのつながりが、現在の生活状況に影響を及ぼしているのかを考察するため、仕事の入手状況も合わせて一覧表を作成した。それが表1である。

まず、先の4つの領域のうち、18人がどこでつながりを持っていると語ったかを見ていきたい。18人のうち2人を除いて、すべての人が家族と同居しており、また鶴見に親族がいる人も15人であった。特に自分の家族、親族とも鶴見にいるという人が18人中14人で、彼らが親族同士のつながりを居住地である鶴見の中で持ちながら生活していることが明らかになるだろう。ただし、こうした親族のつながりが、自分自身の定住の際に果たした役割を具体的に言及した人は、必ずしも多くなかった。男性移住者のブルーノ氏(No.3)の、現在の仕事を鶴見に

表 1 聞き取り対象者のつながり

	M / F		地域への言及	親族、友人関係	職の獲得方法
No.1	M	王氏 (中国福建省出身、15 歳)	有 (ただし中学校の国際教室)	鶴見に家族。友人は主に中国で、チャットする	NA
No.2	M	チャーイ氏 (タイ、在留資格: 国際人文、32 歳)	無	友人は大学、職場	自分
No.3	M	ブルーノ氏 (ブラジル、日系三世、26 歳)	無	鶴見に親族。友人は職場	いここからの紹介
No.4	F	ロサリオさん (ペルー、リマ生まれ、日系二世、40 代)	有 (母の会、P T A)	鶴見に親族	介護の仕事 (誰からかはわからない)
No.5	M	金城氏 (60 代、国籍日本)	有 (沖系中心)	鶴見に家族	自分で起業
No.6	F	新垣さん (64 歳、国籍日本)	有 (ただし町内会には入っていない)	鶴見に親族	友人の紹介 (鶴見)
No.7	F	シルビアさん (ブラジル、非日系、定住者、26 歳)	無	鶴見に親族あり。困ったときは職場のつながりで	求人情報誌
No.8 5/9	M	島袋氏 (50 代、沖縄とフィリビンの両系、日本国籍)	有 (沖系)	鶴見に親族あり。今の仕事の手伝いは沖系	自分で起業。仕事がないときみつけてくれたのは、沖縄系ネットワークの友人
No.9 5/12	M	モハメッド氏 (バングラデシュ、1999 年永住資格取得、40 代)	有	弟も鶴見親族はトランスナショナル	
No.10 5/15	F	マルガリーダさん (トゥルヒージョ生まれ、45 歳、永住者)	有	家族は鶴見、夫方の親族も。ペルー人との交流はやや少ない	地域のおばあちゃんが介護の仕事につながる
No.11 5/15	F	エリーザさん (50 代、サンパウロ生まれ、日系二世、定住者)	無	創価学会の活動がメイン	
No.12 5/20	F	ロサーナさん (フィリピン・ネグロス島生まれ、43 歳)	有 N G O 活動も	妹も夫の兄弟と結婚	夫の自営業を手伝う
No.13 5/25	M	周氏 (中国・西安出身、永住者、44 歳)	無	友人は多い (エスニック・ネットワーク)	仕事は自分の資金で。ただし、手伝いにみんなが来てくれている
No.14 6/5	M	フェルナンド氏 (日系二世、2009 年永住者に変更、44 歳)	無	妻は日本人。日本人の友人とのつながりが多い	友人の紹介
No.15 6/5	F	フランシスカさん (非日系、サンパウロ生まれ、41 歳)	有 (保育園の日本語の先生)	A B C にも来ている	ブラジル人の友達からヘルパー
No.16 6/5	M	マリオ氏 (日系三世、リマ生まれ、ペルー国籍、24 歳)	無	A B C に来ている	
No.17 6/5	F	イーナさん (非日系、ブラジル、永住者、50 代)	有 (エスニック)		自分で起業 (南米系の人から譲り受ける)
No.18 6/29	F	マルシアさん (沖縄系、サンパウロ生まれ、2008 年帰化、30 歳)	無町内との関係は特にない	A B C くらい	仕事はない

住むいところから紹介してもらった、あるいは鶴見ではないが彼の叔母が東京都内に在住しており、ある程度やり取りがあると答えたケースが、もっとも典型的な親族ネットワークの役割を示しているといえるだろう。

「近隣」についてのつながりに言及をしたのは、18人中10人であった。これは親族とのつながりに次いで多い。ここでの「近隣」には本チームが前提としている、日本人とのつながりを提供している場としての近隣だけでなく、エスニック・グループなど自分と同郷・同国出身の友人が近隣に住んでいるという場合も含めている。日本人とのつながりという見方だけでとらえれば、18人中7人が地域で日本人との接点を持っていると答えている（ただし、うち1人は学校の国際教室である）。また、興味深いのは「近隣」との関係を持っていると答えた10人中、女性が6人であったことだ。たとえば女性移住者のロサリオさん(No.4)は、子どもがサッカーを習っていて、そこのお母さん同士のつながりがあり、マルガリータさん(No.10)も町内会の活動にもかかわっている。マルガリータさんはさらに、近隣の高齢女性とのつながりが介護士になったきっかけだと語り、ロサリオさんと同様に、直接ではないものの、間接的な資源となっていることがうかがえる。また、「近隣」に地域での活動をするNGO「ABC ジャパン」との接点まで含めれば、この人数はさらに多くなり、18人中13人が近隣とのつながりを持つということになる。

「友人」、特に職場のつながりではない友人についての言及は、18人中7人にあり、うち鶴見に友人がいると思われるケースは6人だった。前述のようにこの「友人」の中には、「エスニック」のつながりも含まれるが、「友人」が現在の仕事と何らかのつながりがある人が7人中、5人に及んだ。特に男性移住者の金城

氏(No.5)、島袋氏(No.8)は起業をしているが、金城氏は友人のところで働いたうえで独立、島袋氏は仕事がないときに仕事を見つけてくれたのが沖縄系のネットワークだったと述べており、移住者にとって友人からの情報や支援が就業と関係があることがわかるだろう。また、周氏(No.13)の場合も、起業は自



己資金で賄ったが、開店当初の忙しいときに手伝いに来てくれた友人たちについて語っている。友人とのつながりが、雇用や起業といった移住者の生活上の経済的な面を支えるうえで、非常に役だっているといえる。

最後に「職場」だが、職場の人間関係が友人関係の中心である、あるいは職場の人間関係が困難を解決してくれると述べた人は、18人中3人だった。職場に対しての言及が最も少ない。自営業である場合は、生活の場そのものが職場になるのでこの限りではないが、鶴見の外国人移住者にとって、職場での「つながり」というのは、生活するうえでそれほど大きな位置を占めていない。

以上のことから言えるのは、次のことである。起業や社会的成功を収めることのできる移住者が活用していた資源として、最も有用なのは、エスニック・ネットワークを中心とした「友人」のつながりである。これは、これまでの移民研究での指摘通りであるといえよう。一方で、「近隣」でのつながりも、移住者にとって欠かせない役割を持っているといえることが分かった。雇用とのつながりがみられるケースなどもあるが、同時に、保育園の先生が日本語を教えてくれたり、困ったときに手助けをしてくれたり、困難解決の際の資源となっているケースも見られた。「近隣」でのつながりは、必ずしも経済的資源に直結することばかりではないが、ハニファンがいうところの「社会的ニーズ」は十分満たしているといえる。とすれば、移住者にとってエスニック・ネットワークと同様に、地域「近隣」社会でのつながりをいかにつくることができるか、というのが、社会的に孤立せず、日本社会の中で円滑に生活するうえでの鍵となるといえるだろう。では、その近隣でのつながりをつくるうえでのヒントをどこに求めていくのか。以下ではジェンダーを分析の中心にして考察を進めていく。

#### 4 「つながり」におけるジェンダー差

ここで注目したいのは、「近隣」のつながり方におけるジェンダー差である。先に「近隣」との関係を持っていると答えた9人中、女性が6人であったことは指摘したが、女性移住者のほうが、より「近隣」とのつながりをつくりやすいといえるだろう。そして、男女による差は、「近隣」とのつながりをつくりやすいかどうか、という点だけにとどまらない。日本である一定の社会的位置にを占めている移住者のつながりから、その差を見ていきたい。

男性移住者のつながりのあり方と、女性移住者のつながりのあり方を図にまとめたが、まず図1に示したのが、男性移住者の金城氏のつながりのあり方だ。「親族」は自分の直系親族のほか、甥などの近居親族がいる。また「近隣」では「鶴

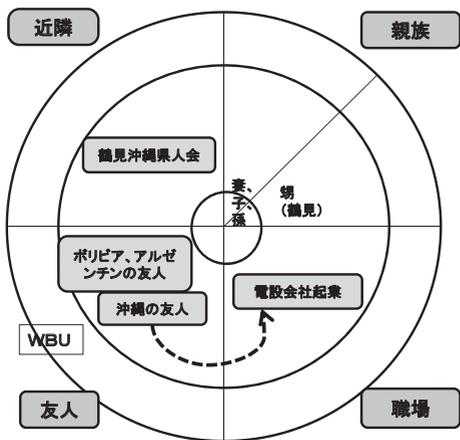


図1 No.5 金城

ことがわかる。さらに、「近隣」のつながりは「友人」のつながりとも重なっている。鶴見という金城氏の居住地には、多数の沖縄出身者がいるので県人会が存在している、というもので、確かに「近隣」でのつながりでありつつも、あくまで「エスニック」なつながりの一つであると言えよう。つまり「近隣」とのつながりはあるが、本チームで前提としている、彼らとバックグラウンドを共有しない、日本人住民とのつながりを意味するとは言えない。とすると実際には、日

見沖縄県人会」などへのつながりがあり、ここでも運営にかかわるような立場である。「友人」も多く、出身のポリビア、アルゼンチンの友人のほか、沖縄にルーツを持つ友人がおり、この友人が電設会社の起業に関係している。また、友人は日本国内にとどまらず、世界中の沖縄出身の移住者とのつながりをつくっている。このようにしてみると、金城氏のつながりは、「近隣」、「友人」を含め「トランスナショナル」なつながりまで豊富である

本人とのつながりは弱いといえるだろう。しかしそれでも、この「近隣」での友人のつながりは非常に強固なものであり、金城氏の雇用につながり、またその後の起業にもつながっている。

一方、女性移住者のつながりのあり方は、男性移住者と比較すると若干の違いがある。女性移住者のマルガリータさんのつながり(図2)を見てみると、「近隣」も「友人」のつながりも非常に豊富である。近隣と友人のつながりの双方とも多いのは、男性移住者の金城氏と

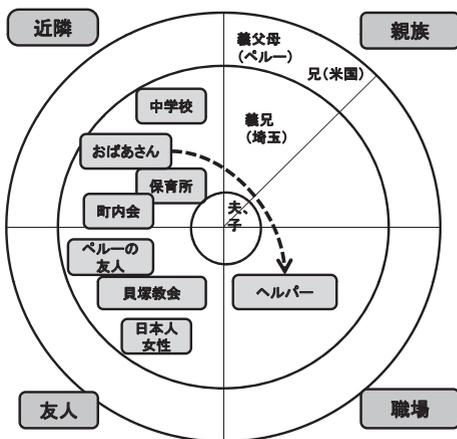


図2 No.10 マルガリータ

同じだ。また、親族のつながりが、日本国内だけでなく出身国やほかの国にも存在する。しかし、女性移住者の持つつながりが男性移住者のつながりと異なるのは、「友人」と「近隣」の関係である。先の金城氏の「近隣」のつながりは、「友人」のつながりと重なる場合があると指摘したが、女性移住者の場合、「近隣」でのつながりが「友人」とのつながりと重なっていることは、ほとんどない。また、「近隣」のつながりの中でも非常にバリエーションが多い。子どもの関係の保育所や中学校のPTAもあれば、すぐ近くに住む人とのつながりや町内会との接点もある。また、「友人」のつながりは、これ以外に教会や母国出身の友人たちなどが存在する。それだけ日本人との接点も豊富であるといえるだろう。また、注目に値するのは、この「近隣」とのつながりが、雇用のきっかけにもなっていることだ。日本人から直接紹介された仕事ということではないが、日本人と接したことがヘルパーになる動機を提供している。その意味では、「近隣」のつながりが、経済資源に間接的につながっていると考えることもできるだろう。

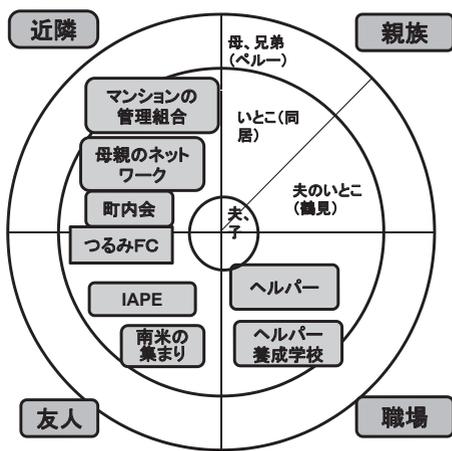


図3 No.4 □サリオ

また同様の傾向は、ほかの女性移住者にもみられる。ロサリオさんのつながりのあり方を示したのが図3である。ロサリオさんのつながりも、親族、近隣、友人とまんべんなく存在し、なおかつバリエーションも豊富である。町内会、マンションの管理組合に、子どもの母親同士のつながりや、子どものサッカーチームの親同士のつながりが近隣に存在する。また友人も、地域のNGOの活動に参加したり、南米系の人々の集まりに顔を出したりしている。また、彼女は現在ヘルパーの仕事をしている

が、仕事をする前に、鶴見駅近くの外国人を受け入れている介護士養成学校に通っていた。「近隣」にこうした介護養成学校が存在し、その学校とつながることができたことは偶然だが、しかし、同時に「近隣」でのつながりを多く持ち、「近隣」を生活の基盤に置く女性移住者だからこそ、こうした学校とのつながりを持つことができた、ということもできるだろう。さらに言えば、「近隣」での学校の存在は、近隣とのつながりが豊富な女性移住者にとって、人的資本を得るため

の手段ともなりうる。近隣とのつながりの多さは、同時に日本人との接点の多さでもあり、「日本語能力の向上」という人的資本になるものでもある。とすれば、経済資源につなげていくことの前段階とみることもできるだろう。

これまでの男性移住者と女性移住者のつながりの違いを述べてきた。まとめると次のことが言えるだろう。①女性移住者のほうが、より地域とのネットワークを作りやすい、②男性移住者のほうが、近隣とエスニック・ネットワークが重なる傾向にある、③女性移住者のほうが、近隣での接点にバリエーションがある、④女性移住者のほうが、地域のネットワークを雇用などの資源に転化する傾向にある、あるいは雇用に転化できる資源を見つけやすい、⑤子どものいる女性移住者の場合、子どものつながりが近隣をつながりの中のバリエーションとなる傾向が強い。とすると、育児期はネットワークが少ないが、将来的に増える可能性がある、⑥近隣とのつながりの多い女性は、人的資本を得る可能性も高い。

男性移住者が近隣とのつながりをまったく持っていないというつもりではない。しかし、近隣とつながる可能性が多い女性移住者は、そのつながりを日本社会での生活を円滑にし、日本社会の中で「包摂」されるように、上手に活用しているといえるだろう。

## 5 多文化共生の地域づくりに関する含意——むすびにかえて

以上見てきたように、鶴見の外国人住民の聞き取りから明らかになった、外国人住民が持つ「つながり」の傾向は、女性移住者の方が、男性移住者と比べてより近隣とのつながりを持ちやすいということにあった。それは日本社会の側から見れば、女性移住者との接点がより持ちやすいということでもある。3節で指摘したように、移住者にとってエスニック・ネットワークと同様、地域「近隣」社会でのつながりをつくることが「多文化共生」の地域づくりには欠かせないとするならば、女性移住者のニーズに配慮することを通して、外国人住民の包摂を成し遂げていく、というアプローチは十分検討に値するだろう。例えば女性の人的資本を高め、就労へつなげようとするれば、介護職への就労を近隣を通じてサポートするような方法も女性移住者の包摂につながるだろうし、また子育て期の女性移住者には、近隣で子どもと共に日本語が勉強できるような場があるといいかもしれない。また保育園、学校のPTAなどを通じて、情報提供をするような場づくりも必要だろう。またより接点の持ちにくい男性移住者は、女性移住者を窓口として、つながりを作っていく、という方法もあるだろう。

さて最後に触れておきたいのは、近隣のNGOの役割についてである。繰り返

しになるが、男性移住者のほうが女性移住者より、近隣でのつながりをより作りやすく、女性の中でもたとえば育児期の女性は、近隣でのつながりをつくりにくい。しかし、表1から明らかなように、近隣の町内会などとのつながりを言及しない人でも、ABC ジャパンにかかわっているという人は、3人いた。特にNo.16のマリオ氏やNo.18のマルシアさんは、近隣とのつながりがほとんどなく、また親族、友人とのつながりも限定的で、なおかつ日本での生活が安定的とは言えないケースだ。しかしそんな彼らでもABCとはつながりがある。ABC ジャパンの富本氏によれば、日本語教室の参加者は女性の方が多いということだが、マリオ氏のように、日本人とのつながりが必ずしも自身の人的資本にも社会関係資本にもなっていないような男性でも気軽に参加できる。また、近隣とのつながりをまったく語らなかつたが、特に日本での生活に不自由をしていなかったフェルナンド氏 (No.14) のような人も、ABC ジャパンにはつながりがある。男性女性問わず、社会的つながりが少ない人から多い人までが自由につながることができる、「近隣」に存在するABC ジャパンのようなNGOが果たしている役割は大きい。少なくともABC ジャパンにつながることで、母国語による情報を得たり、あるいは自分のアイデンティティを確認したりすることができる。直接的な経済資源になることは少ないかもしれないが、少なくとも「つながり」の少ない外国人住民を包摂することに多大な貢献をしているといえるだろう。

こうしたNGOが地域で作り出している「つながり」の場を、行政が様々な方法で支え活用していく、というのが「多文化共生の地域づくり」に欠かせない方法になるのではないだろうか。鶴見区は、多文化共生の地域づくりを宣言しており、また鶴見駅の再開発地区に鶴見国際交流ラウンジもオープンした。NGOと区とラウンジがそれぞれの役割を生かして、「近隣」の日本人住民を積極的に巻き込みながら、その「近隣」につながる外国人住民とのつながりの場を細やかに創出することで、「多文化共生の地域づくり」は実現するのではないだろうか。

---

#### [文献]

- Hanifan, L. J., 1916, "The rural school community center", *Annals of the American Academy of Political and Social Science* 67, pp.130-138
- Loury, G, 1977, "A Dynamic Theory of Racial Income Differences", in P.A. Wallace and A. La Mund (eds), *Women, Minorities, and Employment Discrimination*, Lexington Books.
- Portes,A., 1998, "Social Capital: its origins and applications in modern sociology", *Annual Review of Sociology* 24, pp.1-24.